

利にすぎず、讀者は自分の領解おする前に、金子講師の領解お讀んでしまふであらう。それわ、たとえば數學の問題に初から答が書いてあるようなものでわなないであらうか。老學匠の御親切わ、ありがたいが、或いわ老婆心の度が過ぎていたのてわないかとも思われる。しかし、これわ見解の相違ということでもあらう。さて、それわそれとして、「領解」の部分わ、いかにも金子講師らしい理路整然とした、落ちついた大文章であつて、教行信證お身を以つて讀まれた深い味わいが示されている。これわ教行信證を讀む人に對する最高の指南として、永く光りお失わなないであらうと思われる。

老講師の勞作に對して、あまりにも無遠慮なことお申ししてしまつて、今更、失禮の罪わお許し願いたく、などと、紋切型のご挨拶お申しても、許されそうにもない、と思ひながら筆おおく〔B 6 五三四頁。八〇〇圖。法藏館刊〕

## “Présence du Bouddhisme”

小 川 一 乗

佛教を通して、東洋文化を理解せんとする傾向は、西歐に於て日々に高まりつつあるようである。その意圖が、或は政治的であるにしろ、或は純粹に學問的であるにしろ、それは西歐文化と東洋文化と云う全く相異する特色を有する二大文化の持つ歴史的必然性であると思われる。西歐の諸學者が、その歴史的必然性を認識し、「東アジアの文化は佛教を離れてあり得な

い。」と云う立場に立つて、佛教研究に數多くの偉大な成果を修めている實狀は、我々東洋人のともすれば墮しやすい盲信的な西歐萬能主義の傾向に強い反省を促すと共に、逆輸入的に東洋的精神の再認識を暗に我々に示唆している如くである。

本書は、フランス人學者を中心として佛教研究に携わる世界の諸學者の貴重な研究成果を收集編輯した老大な論文集である。今後斯書が、東洋文化の精髓とも云うべき佛教が「世界の佛教」として廣く親しまれんが爲の重要な位置を占めるであらうことは疑いない。

本書は、本文九五八頁、挿入寫眞數一一〇枚、語彙一八頁、資料四六頁から成つて居り、フランスの支店であるサイゴン、  
「極東アジア研究所」から出版されているが、先に印度政府の  
The Publications Division より刊行された “2500 years of  
Buddhism” の姉妹篇と見られるべき内容のもので、共に東南  
アジアを佛教の idea によつて統一せんとする意圖に應じたものである。

内容(本文)は、大分して四部より成る。第一部は、フランスのフィリオザ、ムス、イタリーのツツテ、フランスのバーパルの四學匠の卷頭文、緒言に類する論文に始まつている。續いてまず第一に「佛陀」について二論文、第二に佛陀の「教説」について四論文があり、佛教の根本的立場が論ぜられている。第三に大乘佛教と上座部佛教についての四論文があり、I. B. ホーナーの「Pañcāśīka 聖典に於ける自由の概念」と云う論文はここに收められている。第四に佛教の「流布」についての四論文があり、その中には、フィリオザのアソカ王に關する論文やそ

の他中國人巡禮者に關する二論文が含まれている。第五に佛教の「知識」「文化」「醫學」等への「寄與」に關する五論文があり、佛教と社會との關連を歴史的に論示している。第六に大乘と小乗との「相互作用」に關する二論文があり、日本からは佐々木現順教授が、ここに於て「中國と日本とに於る小乘學派」を論述している。第七に佛教の「立場」が三論文によつて論述せられ、最後に佛教の「眺望」に關する二論文が寄せられている。

以上の如く、第一部は佛教の歴史的展開を述べたものである。個々の論文は、諸學者の専門的研究であるが、綜合的に一貫して眺めるなら世界各國の佛教の歴史、教學、現狀を統一ある觀點から一篇として見事に構成したものである。

第二部は「テキスト」と云う題目の如く佛教の諸資料に基く教義が論述されている。まず第一に「テキスト」として Pali 聖典と Grek 聖典とが枚舉され、第二に「佛陀」と佛教に於る聖者とへの解説が與えられ、第三に四聖諦によつて佛教の根本「教義」が述べられ、第四に「結論」として四聖諦より導き出される解脱涅槃一が説かれている。これらはすべて、ベルナード・シュリーによつての研究論文である。續いて「鐵眼禪師假字法語」のフランス譯が收められている。

第二部は以上の如きものであるが、ここに於て、Pali 聖典の佛教と禪佛教との資料研究によつて、前者から後者に至る佛教の教義の變遷とその目的「解脱」とを論求しているものであると考えられる。ここに佛教の教義面に於る興味ある問題が提示されている。

第三部は、佛道修習に關する三論文より成つてゐる。それら

は、ラモートの「善法の消滅に關する予言」、フィリオザの「佛教の修行段階」、ラルーの「佛道修行の將來」である。ここに佛教の修道面が論求せられ、將來ますます研究論求せられねばならない佛教の本質的な一分野が、クローズ・アップせられている。

第四部は、『世界に於ける佛教』の「實狀」が主題とせられ、二十六論文によつて詳細に諸々の事情が報じられている。まず、極東アジアに關しては、中國、日本、チベット、ヴェトナム、インドネシア、の五國に於ける大乘佛教と、ビルマ、カンボジア、セイロン、インド、ラオス、タイ、の六國に於ける上座部佛教とが説述せられている。次いで西洋に關しては、ドイツ、ベルギー、アメリカ、フランス、イギリス、オーストラリア、の六國に於ける佛教研究の模様が報告されている。その中で、アンドレ・ミゴが中國に於ける佛教を論じ、我國の鈴木大拙博士が、日本佛教に關する説述の中に、「佛性論」と云う論文を寄せている。

以上の如く、第四部は十七ヶ國に及ぶ世界各國の佛教事情を報じたものであり、この一篇だけで斯書の特徴が充分に満たされている。佛教研究に携わる者にとつて得るところ極めて大である。

なお、本書の終末に收集されている「語彙」(九六一—九七八頁)は、Skt-Pali 漢譯—フランス譯、の對照であつて、色々な場合に於て參考になる學的成果の一つである。

以上、極めて複雑な紹介をして來たが、本書は、佛教の教義、並びにその歴史的地域的關係を知る上に、得がたい資料を

## 新刊紹介

大原性実著

## 教行信證概説

提供している。その内容は個々の専門的な特殊研究としての諸論文を収集編輯したものであるが、反面、我々初學者にとつても充分に理解し得る統一性を有している。その事は、斯書が東南アジアを佛教の「idea」によつて統一せんとしている意圖の下に刊行されたと云う裏面的意義によつて、よく知られるのである。斯書が有している佛教を綜合的統一的に把握せんとする意圖と世界的研究によつてのみ成し得るであろう所の豊富な内容とは、今後の佛教研究の方法に新しい方針を提示している。更に、インド研究上他で見られない珍しい佛教美術の寫眞が多くのせられ、又、巻末には世界各國の文獻目録、ビブリオグラフィ―四四頁、佛教術語の解説、佛教分布地圖、ヒンドウ文化傳來のチャートなどをおさめ、學的探究にとつても完璧を期して編纂された稀に見る大著である。2-6, 1959;

France-Asie, 93 rue Nguyen-van-Thinh SAIGON (Vietnam) 日本代理店 Charles E. Tuttle Co., Nippon Shuppan Kyokai, 1-1 chome, Kasugacho, Bunkyo-ku, Tokyo

本書は宗學の權威者である著者が、その冷厳な態度でもつて多年研鑽され來つた研究成果を、龍大における講義テキストの意味を兼ねて、サーラ叢書として要約・概説せられたものである。従つて初學者にとつては聊か難解であるかも知れないが、本書に依つて教行信證に關する宗學の傳説的解釋は充分に窺い知ることが出来るであらう。

尙卷頭には近年學界で問題にせられてゐる信卷別撰に對する批判も、一章として特に設けられている。

(B 六版、三六三頁昭和三十四・八・一・平樂寺書店發行四五〇圓)(橋谷)

## 豐橋寺院誌

豐橋寺院誌編纂委員會

豐橋市現存の各宗派寺院二百ヶ寺と廢

寺五十ヶ寺を收録。便宜上二十三の地域に分け、各寺院の由緒、境内、什物、墓碑、人士等を中心に戦時の岡市空爆をへて戦後の農地解放に至るまでの變遷がしるされている。寺傳を中心に古記録で補

い批判する方法によつてゐるが、元祿年間の「佛閣記」が現存し有力な筆據を提供している。多くの寺院に亘つてできるかぎり資料を採集し、戦火ののち残存資料を整理記録すると共に廢寺を記念して廢忘に備えた意義は大きい。巻頭に參考文獻を掲げ、末尾に略年表と索引が附されている。地圖が附されれば一層便利であらう。(昭和三十四年八月三十日豐橋佛教會發行、A 5版、六七一頁)(名畑)

## 城端町史

我々は今日、學問的な水準に達した町村史を手にし得るようになった。

これは勿論、戦後における地方大學の成立とそれを中心とする地方史學會の發足に影響されたものであらうが、基本的には、日本史における地方史の位置づけ